

外なるもの

——*Mahāyānasūtrālaṃkāra* 第XVIII章第89-91偈を中心に——

(完)*

早 島 理

解 読 研 究

梗概

		(14因)	(kā.)
0	序論		
1	基本偈頌		kās.89-91
2	《Bāhyārtha の吟味》		
2-A	四大種		
2-A-1	四大種の水	(1), (2)	kā.89c
2-A-2	四大種の風	(3)~(5)	kā.89cd
2-A-3	四大種の地	(6)~(11)	kā.90ab
2-B	六境		
2-B-1~4	六境中の色・香・味・触		kā.90cd
2-A-4	四大種の火	(12)	kā.91a
2-C	補論：論述の順序に関して		
2-B-5	六境中の声	(13)	kā.91b
2-B-6	六境中の法處所摂の色	(14)	kā.91c

(以上前稿)

(以下本稿)

3	《論争を通じての吟味, <i>prcchyate</i> 》	kā.91c
3-1	第一の論難	
3-2	第二の論難	
3-3	第三の論難	
3-4	第四の論難	
3-5	第五の論難	
3-6	第六の論難	
3-7	第七の論難	
3-8	第八の論難	
4	《まとめ》	
	完	

[3 《論争を通じての吟味, prcchyate》]

【本論】 154-7, Ch.648b, P.259b8.

さらに、「有爲なるものはすべて刹那滅である」と立証されたのに、「汝は何故にそのことを認めないのか」と「非刹那滅論者は」詰問されるのである。〔では詰問は〕如何様になされるのか。

【釈流】 P.187b3, D.159b1.

「さらに、『有爲なるものはすべて刹那滅である』と立証されたのに、『汝は何故にそのことを認めないのか』と『非刹那滅論者は』詰問されるのである。」と云ううち、外道（仏教以外の諸学派）や世間一般の人々はこの有爲なるものは無常であることは認めるのに、刹那滅であるとは認めない。何故に無常であると認めるのかと問われて、「非刹那滅論者は云う。」内なる有爲なるものも最後の現われは死であり、壺など〔外なるもの〕も最後の現われは壊滅である。それ故〔有爲なるものは〕無常であると説くのである。このように〔有爲なるものは〕無常であるとは認めているが、刹那滅であるとは認めない彼の人々に対して、「何故に刹那滅を認めないのか」と詰問する。〔この〕詰問への回答が無いことを証因としてもまた、「有爲なるものは刹那滅である」ことが立証されるのである⁽¹⁾。

「〔では詰問は〕如何様になされるのか。」云々と云ううち、有爲なるものの無常を認めても、刹那滅を認めない彼の人々に対して、「如何様に詰問すべきであるのか」と問うならば、〔答えよう。〕彼らに対して次の〔〈1〉～〈8〉の〕ように詰問すべきである、という意味である。

[3-1 第一の論難]

【本論】 154-7, Ch.648b, P.259b8.

〈1〉まず、〔我々刹那滅論者は〕非刹那滅論者に次のことを問うべきである。「汝は有爲なるものの無常性を承認しながら、何故に有爲なるものの刹那滅を承認しないのか」と。

【釈流】 P.187b7, D.159b4.

「〈1〉汝は有爲なるものの無常性を承認しながら、何故に有爲なるものの刹那滅を承認しないのか」と云ううち、〔有爲なるものの〕無常を認めながら、刹那滅を認めない彼らに次のように詰問すべきである。如何様に詰問すべきであるのかと云えば、「汝は有爲なるものの無常を説いて無常を認めながら、有爲なるものの刹那滅を何故に認めないのか」と詰問すべきである。

[3-2 第二の論難]

【本論】 159-9, Ch.648b, P.260a1.

〈2〉もし、彼〔の非刹那滅論者〕が「刹那ごとに無常であることは認識されないから」

とかく答えるならば、[我々は] 彼に次の如くに問うべきである。「灯火などが刹那滅であることは立証されているにもかかわらず、[灯火の] 変化しない[すなわち燃え続けている同じ] 状態ではその[灯火の刹那滅は] 認識されないのだから、何故に[灯火などは] 非刹那滅であると[汝は] 主張しないのか」と。

【釈流】 P.187b8, D.159b5.

「<2>もし、(P.188a) [彼の非刹那滅論者が] 『刹那ごとに無常であることは認識されないから』とかく答えるならば」と云ううち、[非刹那滅論者に対する] 詰問は以下の如くである。

[まず] 刹那滅を認めない彼らは次のように説く。「有爲なるものが最後には死滅し、また壺などが壊滅することが見られる。それ故に[有爲なるものが] 無常であることは認められる⁽²⁾。[もし] 同様に有爲なるものが刹那ごとに消滅するのが見られるならば、我々は[有爲なるものが] 刹那滅であることを認めるであろう。[しかし実際に] そのように刹那ごとに常住ではなく、消滅することは知られないし、見られることもない。それ故に[有爲なるものが] 刹那滅であるとは認められない。」と。

「[我々は] 彼に次の如くに問うべきである。」と云ううち、「刹那ごとに消滅するのが見られないから、[有爲なるものの] 刹那滅は認められない」と説く彼らに対して、さらに(D.160a) 次の如くに詰問すべきであるとの意味である。如何様に詰問すべきであるのかと云えば、それ故に、「灯火などが刹那滅であることは立証されているにもかかわらず、[灯火の] 変化しない[すなわち燃え続けている同じ] 状態ではまたその[灯火の刹那滅は] 認識されないのだから、何故に[灯火などは] 非刹那滅であると[汝は] 主張しないのか」⁽³⁾と説く。[汝の主張では] 刹那滅であると認識されないものは何であれ刹那滅とは認められないことになる。[ところが] 灯火や水などが連続していても刹那滅であることは、仏教者と外道の両方で承認されている。このようにそれら灯火や水などは刹那滅であっても、風により揺り動かされない時は刹那滅であるとは認められない⁽⁴⁾。[その場合に] 何故にこれらについても刹那滅であると認めるのかと詰問すべきである。

[3 - 3 第三の論難]

【本論】 154-11, Ch.648b, P.260a2.

<3> もし [非刹那滅論者が] 「前の如くには後のものが認識されないから、[灯火が非刹那滅であるとは認められない、即ち灯火は例外的に刹那滅である]」とこのように答えるならば、[我々は] 彼に次の如く問うべきである。「[そうならば灯火以外の] 有爲なるものもまた同様 [に刹那滅] であると何故に[汝は] 認めないのか」と。

【釈流】 P.188a6, D.160a3.

「<3> もし [非刹那滅論者が] 『前の如くには後のものが認識されないから、[灯火が非刹那滅であるとは認められない、即ち灯火は例外的に刹那滅である]』とこのように答えるならば、[我々は] また彼に次の如くに問うべきである。」と云ううち、[非刹那滅論者に対する] 詰問は以下の如くである。

もし「非刹那滅論者が」「灯火は以前には色が輝き、後にはその[色の輝き]は現れなくなる。灯火は小さくなって輝かなくなり、漸少して最後にはその同じ灯火が消滅して現れなくなる。それ故に刹那滅である」と説きながら[同時に],「その[灯火]とは別な壺(P. 188b)などの他の有爲なるものは[ある一定の]歳月にわたって存続するが,[その間に]漸少することは無いから刹那滅とは認められない」とも説くならば、再び彼に次のように詰問す[べきであ]る。

如何様に詰問すべきかと云えば、それ故にまた「「[そうならば灯火以外の]有爲なるものもまた同様[に刹那滅]である」と何故に[汝は]認めないのか」⁽⁵⁾と説く。この[灯火の]ように、初めに顕現していて後に顕現しなくなるものは刹那滅であると認めるのならば、芽・家・壺などもまた初めには顕現していて、瞬時の間に (bar du dbyi bas dañ) 別な色などへと変化して、後には現れなくなる。この場合に、何故に[壺などの有爲なるものすべて]刹那滅であると認めないのかと詰問すべきである。

[3-4 第四の論難]

【本論】154-12, Ch.648b, P.260a3.

〈4〉もし「非刹那滅論者が」「[刹那滅であると承認されている]灯火などと、その[灯火]とは別な[芽・家・壺などの]有爲なるものとは、非類似なものであるから」とかく答えるならば、[我々は]彼に次の如くに問うべきである。実に、非類似性には二種類ある。〈a〉自性の非類似性 (svabhāva-vailakṣaṇya) と、〈b〉作用の非類似性 (vṛtti-vailakṣaṇya) とである⁽⁶⁾。

〈4-a〉まず、この[汝の説く非類似性]がもし自性の非類似性を意図しているのであれば、まさしく譬え(灯火と他の有爲なるものとを比べること)は理にかなっている。何となれば、その自性そのものはその[同じ自性の]譬えにはならないからである。たとえば灯火は灯火の[譬え]にはならないし、牛は牛の[譬え]にはならない如くである。

〈4-b〉あるいは、[汝の説く非類似性が]作用の非類似性[を意図しているの]であれば、まさしく譬えは[理にかなっている]。灯火などが刹那滅に生じていることは承認されているからである⁽⁷⁾。

【釈流】P.188b3, D.160a7.

「〈4〉もし「非刹那滅論者が」「「[刹那滅であると承認されている]灯火などと、その[灯火]とは別な[芽・家・壺などの]有爲なるものとは、非類似なものであるから」とかく答えるならば」と云ううち、[非刹那滅論者に対する]詰問は以下の如くである。

もし「非刹那滅論者である」他の人々が「灯火と、壺などの他の有爲なるものとは、相が(D.160b)非類似である。灯火は刹那滅を自性として生じ、熱を持ち、照らし出す相がある。他方壺などは……⁽⁸⁾堅固で水を注ぐことができる相がある。それ故相が非類似であるから、灯火は刹那滅であっても他の有爲なるものは刹那滅ではない。」と説くならば、「「[我々は]また彼に次の如くに問うべきである」⁽⁹⁾。

如何様に問うべきかと云えば、それ故に、「実に、非類似性には二種類ある。〈a〉自性の

非類似性 (svabhāva-vailakṣaṇya) と、〈b〉作用の非類似性 (vṛtti-vailakṣaṇya) とである。」と説く。さて、有爲なるものの相互に異なるものに二種類ある。〈a〉自性の非類似性と、〈b〉作用の非類似性とである。このうちで〈a〉自性の非類似性とは火の自性である熱と水の自性である湿との如くである。〈b〉作用の非類似性とは火などが刹那ごとに生滅する〔作用〕と、壺 (P.189a) などの〔火以外の〕有爲なるものが生じた後に一定の期間をおいて⁽¹⁰⁾最後に消滅する仕方での作用と〔の如く〕である。

「〈4-a〉まずこのうちで、この〔汝の説く非類似性〕がもし自性の非類似性を意図しているのであれば、まさしく譬え (灯火と他の有爲なるものとを比べること) は理にかなっている。」と云ううち、もし灯火は熱く輝くことを自性とし、他方その〔灯火〕とは別な壺などの他の有爲なるものは、堅固にして水を注ぐことができる自性がある。それ故自性が非類似であることが認められる。このように灯火は有爲にして刹那滅であり、刹那滅を立証する譬えにふさわしい。他方、あるもの〔を立証するため〕の譬えとして同種のものを提示することは理にかなっていない。

他ならぬこのことを示さんがために、「何となれば、その自性そのものはその〔同一のもの〕譬えにはならないからである。たとえば、灯火は灯火の〔譬え〕にはならないし、牛は牛の〔譬え〕にはならない如くである。」と説く。このように、ある有爲なるものが常住もしくは無常であると確立される時、〔その〕自性はそれとは別な他のものを比喻として立証される。たとえば太陽の光の熱さを立証する場合に、それと自性を一にする火を比喻に立てて、「熱に区別の無きが如し」と云う。あるいはガヴァヤを立証するとき比喻に牛を立てて、「ガヴァヤはたとえば牛の如し」として比喻 (D.161a) を立てるのである。しかしまったく同一のものを比喻に立てるのは理にかなっていない。たとえば、「灯火は灯火の如し」とか「牛は牛の如し」とかいう比喻は立てられない如くである。

「〈4-b〉あるいは、〔汝の説く非類似性が〕作用の非類似性〔を意図しているの〕であれば、まさしく譬えは〔理にかなっている〕」⁽¹¹⁾と云ううち、もし〔対論者が〕この灯火と別な壺などの有爲なるもの〔の作用〕は、〔灯火の〕生じては滅する〔刹那滅の〕作用とは非類似であると説くならば、それ故に、壺などの比喻に灯火〔の譬え〕を立てるのである。このように世間では灯火は刹那滅であると認められているが、壺は刹那滅であるにもかかわらず、刹那滅であると世間では認められていない。それ故に、刹那滅であると (P.189b) 認められているこの灯火を比喻として、刹那滅であるとは認められていない壺が刹那滅であることを立証するのである。

【広註】 P.173a1, D.154a5.

「〈4〉もし〔非刹那滅論者が〕『〔刹那滅であると承認されている〕灯火などと、その〔灯火〕とは別な〔芽・家・壺などの〕有爲なるものとは、非類似なものであるから』とかく答えるならば」と云うのは、灯火などは刹那滅である。一方山などは堅固〔にして常住〕である。この〔両者〕は非類似である。したがって灯火などは刹那滅であるとすでに立証されたものである。

〔さて〕比喻〔について〕論じなければならない。これら〔山など〕を〔刹那滅であると〕立証するときは、〔すでに刹那滅であると〕立証済みのこの灯火を〔比喻と〕して、未

だ〔刹那滅とは〕立証されていない、〔灯火とは〕別な山などの有爲なるものは刹那滅であることを立証すべきである。

二種の非類似のうちで、〈a〉自性の（D.154b）非類似性（svabhāva-vailakṣaṇya）とは、地・水・火・風の堅さ〔・湿り気・熱さ・動き〕などは相互に自己の相が非類似である〔ことを云う〕。〈b〉作用の非類似性（vṛtti-vailakṣaṇya）とは、灯火などの作用と山などの〔作用〕とは〔相互に〕別々である〔ことを云う〕。作用とは〔作用の〕あり方（tshul, *naya）である。灯火などの作用が他ならぬ刹那滅であることはいつでも明白である。〔しかし〕山などの〔作用が刹那滅であることは〕同様〔にいつでも明白〕なのではない。

〔3-5 第五の論難〕

【本論】 154-17, Ch.648b, P.260a6.

〈5〉さらに、〔我々は〕彼〔の非刹那滅論者〕に次の如くに問うべきである。「『乗り物が現にあるとき、乗り物に乗っている人は〔乗り物の移動とともに〕行くであろう』ということを汝は認めるや否や」と⁽¹²⁾。

【釈疏】 P.189b4, D.161a3.

「〈5〉さらに、〔我々は〕彼〔の非刹那滅論者〕に次の如くに問うべきである。『乗り物が現にあるとき、乗り物に乗っている人は〔乗り物の移動とともに〕行くであろう』ということを汝は認めるや否やと。」と云ううち、無常を認めながら刹那滅を認めない彼の人々に、また次の如くに詰問すべきである。刹那滅を認めない汝は、〔人が〕馬に乗らない〔で止まっている〕か、〔馬に乗っていてもその〕馬がどこへも行かず止まっている場合に、その〔馬に〕乗った人がどこか別の場所へ移動することを認めるや否や、と問うのである。もし〔人の〕乗った馬が他の場所へ移動しない場合は、それに乗った人が他の場所へ移動することは絶対に無い。〔この場合に馬に乗った〕人がもし他の場所へ移動したとすれば、〔その人の〕乗った馬も必ずや他の場所へ移動しているはずである。

〔3-6 第六の論難〕

【本論】 154-18, Ch.648b, P.260a6.

〈6〉もし、「決して〔認め〕ない」と答えるならば、〔我々は〕彼〔の非刹那滅論者〕に次の如くに問うべきである。「眼〔根〕などが存するとき、それに依拠して〔眼〕識〔など〕が次々と生じて来るのは理に合わないのか〔否か〕」と。

【釈疏】 P.189b4, D.161a5.

「〈6〉もし、『決して〔認め〕ない』と答えるならば」と云ううち、〔我々は〕彼に次の如く問うべきである。刹那滅を認めない人々は次のように説いて、「馬に乗ることなく人が他の場所へ移動する場合に、馬〔だけ〕が他の場所へ移ることは認めないが、人と同様に馬も他の場所へ移動することは認める」と主張する場合に、彼にまた次のように詰問すべきである。如何様に詰問すべきであるのかと云えば、それ故に、「眼〔根〕などが存すると

き、それに依拠して「眼」識「など」が次々と生じて来るのは理に合わないのか「否か」と説く。たとえば馬に乗った人が他の場所へ移動する場合、馬もまた他の場所へ移動するように、もし眼根などに依存する「眼」識「など」が刹那滅であると認められる場合は、(D.161b) 其の依拠となる眼などの五根もまた刹那滅でなければ不合理である。もし眼根などが常に「同じ状態に」止まるならば、それに依拠する識が刹那滅の相続として生じるのは不合理である。眼根などが常住ならばそれに依拠する識もまた常住となるはずであり、もし識が無常ならば根もまた無常となるであろう。

〔3-7 第七の論難〕

【本論】154-19, Ch.648b, P.260a7.

〈7〉もし「非刹那滅論者が」「しかし、灯芯に依拠して「灯火が燃え続けるとき、」灯火は次々に生じ「て滅す」るが、灯芯が同じ状態で存続することが見られるではないか。〔それ故、灯火は刹那滅であるが、灯芯は刹那滅ではない。〕」とかく答えるならば、〔我々は〕彼「〔の非刹那滅論者〕」に次の如くに詰問すべきである。「〔灯芯の同じ状態は〕見られない。それは次々に生じつつ、刹那ごとに灯芯の変化が生起しているからである」と。

【釈疏】P.189b8, D.161b2.

「〈7〉もし「非刹那滅論者が」「しかし、(P.190a) 灯芯に依拠して「灯火が燃え続けているとき、」灯火は次々に生じ「て滅す」るが、灯芯は同じ状態で存続する「ことが見られるではないか。』」とかく答えるならば、〔我々は〕彼「〔の非刹那滅論者〕」に次の如くに詰問すべきである。」と云ううち、もし刹那滅を認めない人々が次のように説くならば、すなわち「灯火は灯芯に依存して光り輝き、灯火自体は次々に生じては滅するが、その灯芯は滅することなく常に存続するのが見られる。同様に「眼」識「など」が眼根などに依存する時、識は連続して生・滅を繰り返すが、根は滅することなく連続して存続する。」と主張するならば、彼にまた次の如くに詰問して、回答を要求すべきである。

如何様に回答を要求すべきであるのかと云えば、それ故に、「〔灯芯の同じ状態は〕見られない。それは次々に生じつつ、刹那ごとに灯芯の変化が生起しているからである。」と説く。すなわち、灯火の火炎によって灯芯が燃焼し、それによって灯火の流れは刹那ごとに消滅して行く限り、その限り、灯芯は燃焼した刹那ごとに消滅しつつ他のものへと変化する。したがって灯火は消滅するが、灯芯は「あたかも」消滅しない「如くに現われる」。そして最終的には依処「である灯芯」も「燃焼しつくして」見えなくなる。それと同様に識は刹那滅であり、その依処である根は「また」刹那滅である。

【広註】P.173a5, D.154b2.

「〈7〉それは次々に生じつつ」と云うのは、灯火が次々に生じつつ、である。「刹那ごとに灯芯の変化が生起しているからである」と云うのは、灯火が変化するから、灯芯もまた刹那ごとに「変化しつつ」生起していると理解すべきである。

[3-8 第八の論難]

【本論】 154-22, Ch.648b, P.260a8.

〈8〉もし「非刹那滅論者が」「有爲なるものが〔すべて〕刹那滅であるならば、あたかも灯火に基づいて〔刹那滅が〕承認されるように、〔世の人々には、有爲なるものの〕刹那滅が何故に承認されないのか」とかく問うならば、〔我々は〕彼〔の非刹那滅論者〕に次のように説くべきである。「〔何となれば、それは〕轉倒の事実によってである。実に類似したものの流れが次々と生じて来るから、これら〔有爲なるもの〕の刹那滅であることが理解されないのである。それ故に、〔実際は刹那ごとに〕別々であるにもかかわらず、『これこそ同じあれである』と云う轉倒が生じて来るのである。」と⁽¹³⁾。

【釈疏】 P.190a6, D.161b6.

「〈8〉もし「非刹那滅論者が」「有爲なるものが〔すべて〕刹那滅であるならば、あたかも灯火などに基づいて〔刹那滅が〕承認されるように、〔世の人々には、有爲なるものの〕刹那滅が何故に承認されないのか」とかく問うならば」と云ううち、もし刹那滅を認めない人々が次のように問うならば、すなわち「もし灯火が刹那滅であるように壺などの有爲なるものも刹那滅であるならば、灯火が刹那滅であると世間の人々が言うように、同様に（D.162a）壺などの他の有爲なるものもまた刹那滅であると何故に世間では言われ、認められないのか」と問うならば、〔我々は〕次のように返答すべきである。

如何様に返答すべきであるのかと言えば、それ故に、〔「何となれば、それは」轉倒の事実に（P.190b）よってである。実に類似したものの流れが次々と生じて来るから、これら〔有爲なるもの〕の刹那滅であることが理解されないのである。〕と説く。壺などこれらのものは無常であるにもかかわらず、不浄を清浄であると考え、無常を常住であると考えて轉倒が生じることを原因として、刹那滅であるにもかかわらず、常住であるとする考えが生じるのである。如何様にか。〔有爲なるものは〕刹那滅の連続として生じる。それ故、刹那滅である色・界などは〔一刹那〕後に〔も〕刹那滅であり、〔それは一刹那〕以前と全く類似した流れとして生じる。それ故〔類似したものが連続して生じるのであるから〕、これら〔の連続〕ゆえに刹那滅であるとは理解されない。この同じ意味を明示するために、〔それ故に、〔実際は刹那ごとに〕別々であるにもかかわらず、『これこそ同じあれである』と云う轉倒が生じて来るのである。〕と説く。このように有爲なるものは刹那滅の連続として生じるから、前前の刹那に滅したものが後後の刹那に〔類似はしているが〕別なものとして生じるのである。〔このように実際は〕これからあれへと変化していて区別があるにもかかわらず、後後の刹那に生じたものは前前の〔刹那の〕ものと全く類似したものとして生じるから、〔世間の人々は、有爲なるものは〕刹那滅ではないと理解するのである。〔一刹那〕前に見たものと全く同じものとして後〔の刹那〕にも「〔同じ〕これを見る」という轉倒した知識が生じるのである。

[4 《まとめ》]

【本論】 154-25, Ch.648b, P.260b2.

さもなければ、無常なるものを常住であるとする轉倒はあり得ないであろう。それ〔轉倒〕が〔初めから〕なければ、雜染はないことになる。〔雜染がなければ〕それならば、何に基づいて清淨があるのか、とかくの如く論難することに基づいてもまた「有爲なるものはすべて刹那滅である」ことが立証されたのである。

(完)⁽¹⁴⁾

【釈疏】P.190b5, D.162a5.

「さもなければ、無常なるものを常住であるとする轉倒はあり得ないであろう。」と云ううち、もし、有爲なるものは刹那滅である〔と正しく理解されている〕ならば、後後の刹那のものが前前の〔刹那のもの〕に類似して生じているのであるから、前の〔刹那の〕ものと〔同一では〕ないにもかかわらず「前と同じであるとする」という轉倒した知識が生じることはないはずである。しかしものは常に存続している〔ように現われる〕から、後〔の刹那〕に見る時にも、前〔の刹那〕と同じものを見ることになる。したがって、ものを轉倒して見るから不淨なるものを清淨であると執着し、無常なるものを常住であると執着する轉倒がなくならないのである。

「それ〔轉倒〕が〔初めから〕なければ、雜染 (D.162b) もないことになる。〔雜染が無ければ〕それならば、何に基づいて清淨があるのか、とかくの如く論難することに基づいてもまた「有爲なるものは (P.191a) すべて刹那滅である」ことが立証されたのである。」と云ううち、もし世間の人々に〔初めから〕轉倒がないのであれば、そうならば轉倒がないのであるから、貪欲などの雜染となるものも〔もともと〕ないことになろう。何故にか。あらゆる雜染は轉倒から生じて来る〔からである〕。このように雜染が〔初めから〕ないのであれば、衆生は本来解脱していることになる。したがって、〔佛道を修行して〕最後に清淨になり、涅槃することは何に基づいてあるというのか。涅槃することがなくなってしまうであろう。しかし実際はそうではないから、以前には雜染であって、後に涅槃することになるのである。

以上のように、〔対論者に〕詰問して回答がないという〔この論難の〕テーマに基づいてもまた「有爲なるものはすべて刹那滅である」ことが立証されたのである⁽¹⁵⁾。

(完)

註 記

* 本稿は「外なるもの——*Mahāyānasūtrālaṃkāra* 第 XVIII 章 第89-91偈を中心に——」,「同 (承前)」(長崎大学教育学部『社会科学論叢』No37, 昭和63年 3 月, 同No38, 1989, 3 ; 以下各々「前稿 1」,「前稿 2」として引用)に続くものである。

1) ここ〔3《論争を通じての吟味, *prcchyate*》〕に対する Sthiramati の註釈は注目に値する。彼は「仏教以外の諸学派 (外道) や世間一般の人々は、有爲なるものは無常であるとは認めるのに、刹那滅とは認めない。」と云う。このいわば世間の常識を打破し、仏

教の「無常」とは「刹那滅」であることを世間の人々に理解してもらわなければならない。ここで八種からなる論争を、四大種・六境の刹那滅立証とは別に、始めると云うのである。それ故にこの八種の論難は、「汝は有爲なるものの無常性を承認しながら、何故に有爲なるものの刹那滅を承認しないのか」([3-1 第一の論難])という「有爲なるものの無常性」を認めても「有爲なるものの刹那滅」を認めない人々に対するそれから始められるのである。

「内なる有爲なるものも最後の現われは死であり、壺など外なる有爲なるものも最後の現われは壊滅である。それ故有爲なるものは無常である」ことは世間一般の人々も認めていると Sthiramati は云う。人はいずれは死ぬ、あるいは壺はいつかは壊れる。この世に永遠不変のものは何ぞ存しない。それゆえ「諸行無常」である。「無常」にたいするこの理解は現代の我々にも近いものである。

しかし Sthiramati は主張する。釈尊が説かれた「無常」とはそのような、たとえ最終的には消滅するとしても、滅するまでの一定期間は存続しているという意味では断じてない。そうではなく、刹那ごとに生・滅を繰り返す刹那滅こそが釈尊がお説きになった「無常」の真の意味である。この真の意味を伝えんがために Maitreya-nātha 尊師は偈頌を造られ Vasubandhu 法師は註釈を施されたではないか、と。Sthiramati のかような眩きが聞こえるかのようである。

このように「無常」の真の意味が「刹那滅」であることを立証する必要性は、ここ瑜伽行学派にのみならず後代の諸論書においても窺われる。たとえば Mokṣakaragupta は彼の著書 *Tarkabhāṣā* で「単純同一推論式」により「有爲なるものはすべて刹那滅である」ことを立証している（梶山訳『論理のこぼれ』第三章第二節「同一性の推論式による刹那滅性の論証」中公文庫 pp.70-72参照）。Mokṣakaragupta による厳密な推論式を用いたこの刹那滅論は、「有爲なるものは生じた瞬間に自ら滅する」という意味で「諸行無常」を「諸行刹那滅」として論証したものであり、その点に限定すれば、ここ MSA 第 XVIII 章の刹那滅論と同質の流れにあるものと云えよう。

- 2) P.(188a2), D.(159b6) はともに *mi ḥdod de/* であるが *ḥdod de/* にテキストを訂正して読む。
- 3) MSABh (世親釋) の *akṣaṇikatvaṃ kasmān neṣyate/*, *skad cig ma ṇid ma yin par ciḥi phyir mi ḥdod/* 「何故に非刹那滅であると主張しないのか」を SAVBh は *ji ltar skad cig mar ḥdod/* (P.188a4-5, D.160a1), **kṣaṇikatvaṃ kasmād iṣyate/* 「何故に刹那滅であると認めるのか」と変えて引用する。今は MSABh に従って訳出する。
- 4) P.(188a6), D.(160a3) はともに (*skad cig ma yin par*) *rig na/* であるが (*skad cig ma yin par*) *mi rig na/* にテキストを訂正して読む。
- 5) P.(188b2), D.(160a5) は *ḥdu byed rnam la yaṅ phyis de ltar ciḥi phyir* (P.om.) *mi ḥdod/* であるが下線部 *phyis* は削除して読む。

6) ここ「第四の論難」で刹那滅論者が、「刹那滅であると承認されている灯火」を例に「刹那滅であるとは承認されていない有爲なるものすべて」の刹那滅を立証しようとするのにたいして、対論者の非刹那滅論者はこの両者が相を異にするからと反論する。この「相を異にするから、vilakṣaṇatvāt」という反論にたいし、MSA およびその注釈書はこの「非類似性 *vailakṣaṇya*」にかんして〈a〉自性の非類似性 (*svabhāva-vailakṣaṇya*) と、〈b〉作用の非類似性 (*vr̥tti-vailakṣaṇya*) という二種の分類を説く。そのうち〈a〉自性の非類似性とはたとえば火の自性である「熱」と水の自性である「湿」との、あるいは灯火の自性である「熱く輝く」と壺の自性である「堅固で水を保持する」との非類似性であり、また同じ「熱」にしても太陽光線の「熱」と灯火の「熱」との非類似性であるという。これら両者が異なるものであることは世間一般に認められているところである。

他方〈b〉作用の非類似性とは、たとえば灯火の作用と山の作用との非類似性であるという。前者灯火の作用が刹那滅であることは世間でも認められているが、後者山の作用は刹那滅とは認められず、ある一定期間持続するものとして受けとめられている。作用の時間の差異が「作用の非類似性」と称されているのである。

この非類似性の分類に依拠して MSA は次のように自己の命題の正当性を主張する。まず対論者の反論の根拠「相を異にするから、vilakṣaṇatvāt」が自性の非類似性に因ると云うならば、灯火の自性と他の有爲なるものの自性とが非類似であることは当然であるから、灯火を比喻にして他の有爲なるものの刹那滅を立証することは理に適っている。あるいはもし対論者の根拠「相を異にするから、vilakṣaṇatvāt」が作用の非類似性に因ると云うならばこれこそ我々刹那滅論者の主張するところである。「非類似性」に第三の選択肢は存在しないから、いずれにしても我々の主張は立証される、と云うものである。

ところでこの「第四の論難」で展開される「非類似性 *vailakṣaṇya*」の分類について二、三の問題点を指摘しておきたい。

[I] 先ず「非類似性 *vailakṣaṇya*」の分類が自性 (*svabhāva*) と作用 (*vr̥tti*) とに基づいてなされていることである。この分類の仕方は例えば『俱舍論』第一章 *kā.12cd* を想起させる。周知のようにこの偈頌は四大種の説明であるが、四大個々のダルマの分類、個々のダルマをしてダルマたらしめるものをここでは自性 (*svabhāva*) と作用 (*karma*) の点から論じているのである。ちなみに *Abhidharmakośabhāṣya* は次のように説きはじめて偈頌を展開する。“te punar ete dhātavaḥ *karmanī* samsiddhā kiṃ *svabhāvās cety āha*” (p. 8) (なお桜部建『俱舍論の研究』pp.159-160参照)。そして具体的に地の自性に堅さ (*khara*)、作用に保持 (*dhṛti*) をあげているのはよく知られている。このようにあるものを他のものから区別するさいに、自性と作用とをもってするのはきわめてアビダルマ的な思考法といえよう。その意味でここ「第四の論難」における「非類似性 *vailakṣaṇya*」の分類は、「作用」の語に *vr̥tti* と *karma* の違いがあるものの、アビダルマ的色彩が強く感じられるのである。

[II] 次に自性の非類似性 (*svabhāva-vailakṣaṇya*) で述べられている「灯火は灯火の譬えにならない」とか「ガヴァヤは牛のごとし」(*SAVBh*) という議論は、『ニヤーヤストトラ』1.1.1に列挙されている十六句義 (*padārtha*) 中の喩例 *dr̥ṣṭānta* や、『瑜伽

論』「因明處」に説かれる同類 *sādharmya*・異類 *vaidharmya*,あるいは比定 *upamāna* との関連性が問題となろう。龍樹 (Nāgārjuna) 造とされる『ヴァイダルヤ論』の「喩例の考察」(梶山雄一訳『龍樹論集』中央公論社, 大乘仏典14所収, pp.202-204, p.393)に「火は火のたとえにならない」云々の議論が見られる。その中では同類・異題の議論はあるが、今問題になっている「非類似性 (*vailakṣaṇya*)」が直接論じられることはない。

あるいは上記 [I] の議論とも関連するのであるが、『瑜伽論』本地分中「聞所成地」の「因明處」に説かれる「同類者... 比復五種... 二自體相似 三業用相似... 自體相似者 謂彼展轉其相相似 業用相似者 謂彼展轉作用相似...」(vol.15,357a, 対応する『顕揚聖教論』は vol.11,531c-532a),「所成立義有二種者 一自性 二差別所成立 自性者 謂有立為有 無立為無所成立 差別者 謂有上立有上 無上立無上 常立為常 無常立無常...」(vol.15,356c, 同『顕揚聖教論』vol.11,531c)の論述や、同じく「比量」の項で展開される「體比量者 謂現見彼自体性故...., 業比量者 謂以作用比業所依...」(同358a, 同『顕揚聖教論』533a)という論述は、そこで説かれる内容は別にして、論証式や喩例において「自體と作用, 業」,「自性と差別」という分類が見られる点で興味を引くものがある(梶山「仏教知識論の形成」, 講座大乘仏教『認識論と論理学』所収, 参照)。しかしここ「非類似性 (*vailakṣaṇya*)」における二種の分類との関連性は遺憾ながら不明である。

[III] さらに興味深いのは 作用の非類似性 (*vr̥tti-vailakṣaṇya*) にて展開される作用の議論である。上述のようにこの議論では①刹那滅の作用と②持続性のある作用とに作用を一応分類し、最終的には前者「刹那滅の作用」に収斂させる。その場合作用に持続性があるかのように錯覚するのは後述【本論】[3-8 第八の論難]で論じられるように「類似したものの流れが次々と生じて来るから *sadṛśasampratiprabandhavṛtṭyā*」であるという。この理論は後代の Dharmakīrti 以降の存在の規定である「効果的作用能力 *arthakriyāsāmarthi*」を思いおこさせる。

Dharmakīrti の「効果的作用 *arthakriyā*」について詳説する能力を筆者は持ち合わせていない。しかし桂紹隆「ダルマキールティの因果論」(『南都仏教』No.50), 赤松明彦「ダルマキールティの論理学」(講座大乘仏教『認識論と論理学』所収)などの優れた諸論攷が明かにしているように、ダルマキールティが実在に「*arthakriyā* の可能なもの」という明確な定義を与え、「存在するもの——*arthakriyā* が可能で、因果効力をもつもの——は刹那滅である」という刹那滅論証を行ったこと、また刹那滅の存在にもかかわらず持続する同一のものと我々が思いこむのは「各瞬間に生じては滅するものが次々と類似した瞬間を生じるから同一と錯覚したにすぎない」(桂, 上掲論文 p.102)と論証したことは周知のとおりである。このように Dharmakīrti の「効果的作用 *arthakriyā*」の理論を理解するとき、いま論じている MSA 第 XVIII 章 kā.91c における「第四の論難」(それが同 kās.82-91における刹那滅論をふまえたうえであることは云うまでもないが)における「作用 *vr̥tti*」の理論との共通性に驚かざるをえない。当然のことながら, Dharmakīrti のそれは epistemology に重点がおかれアポーハ論へと展開していくのに比して、ここ MSA のそれが三性説を基盤としてより ontology の方向性を示している点に差異が認められる。いずれにしても MSABh (Tib.伝では Vasubandhu 著) や SAVBh

(Sthiramati 著) の中に Dharmakīrti の「効果的作用 arthakriyā」の理論がいわば先取するかのよう展開されていることは注目に値しよう。

以上のように幾つかの問題を含むものの、この「非類似性 *vailakṣaṇya*」の二種の分類については遺憾ながら不明な点が多い。識者のご教示をお願いする次第である。

- 7) 現行 Lévi 梵本では...*pradīpādīnām prasiddhatvāt/ksaṇikatvānuvṛtteḥ punaḥ sa idam...*であるが、Tib.訳に基づき及び SAVBh, MSAT をも参照して...*pradīpādīnām prasiddhatvāt kṣaṇikatvānuvṛtteḥ/punaḥ sa idam...*と句切りを訂正して読む。
- 8) *nam žig na phyis žig ciñ* は欠訳した。
- 9) MSABh (世親釋) の Tib.訳は *de la ḥdi skad ces brjod par bya ste/* (P.360a3-4) であるが、ここ SAVBh は *de la yañ ḥdi skad du bstan par byaḥo/* として引用する。
- 10) *skyes nas dus thag (D.tha) gi zad (D.brad?) cig gis chod de/* (P.189a1, D.160b4) はあるいは別な意味か？
- 11) MSABh (世親釋) の *atha vṛttivailakṣaṇyam ata eva dṛṣṭāntatvam.../*, *ḥona te ḥjug pa mi ḥdra ba yin no že na/de ṇid kyī phyir dpe ṇid du ruñ ste/* を SAVBh は *de ste ḥjug pa mi mthun na yañ de bas na dper bstan te/* (P.189a7, D.161a1) と変えて引用する。今は MSABh に従って訳出する。
- 12) ここ「第五の論難」から「第七の論難」までは「有爲なるものはすべて刹那滅である」ことを立証する過程での比喻の問題である。「第二～第四の論難」のテーマは、世間では「無常」であるとは承認されていても「刹那滅」であるとは認められていない有爲なるものすべてを、すでに世間でも刹那滅であると承認されている灯火に基づいて、刹那滅であると立証するものであった。(灯火が刹那滅であると内外の諸学派によって承認されていることは、例えば『成業論』山口益訳 p.87-94などを参照されたい。)

先ず「第五の論難」は「無常 (有爲なるもの)」と「刹那滅 (灯火)」との関係を「乗り物」と「乗り物に乗っている人」とに譬える。後者が移動すれば前者が移動したことは必定であるように、灯火が刹那滅であるならば有爲なるものはすべて刹那滅であることも必定であるとするものである。たとえば乗り物から降りた「人」はもはや「乗り物に乗っている人」ではないし、「乗り物」を別にして「乗り物に乗っている人」はありえないように、「乗り物に乗っている人」と「乗り物」とは分離して考えられない。同様に「刹那滅」と「無常」とは、無常であれば刹那滅であり、刹那滅を別にして無常は考えられないとして、相互に遍充しあう同一範疇のものとして論じている。

このように「無常」と「刹那滅」との関係に考慮しつつ、「乗り物」と「乗り物に乗っている人」とを「依処」と「依存するもの」としてとらえて次の「第六の論難」、「第七の論難」へと論は展開する。前者では認識作用における「根」と「識」との関係であり、後者では灯における「灯芯」と「灯火」との関係である。いずれの場合も「根」・「灯芯」

が無常であり「識」・「灯火」が刹那滅であると認められ、さらに「識」は「根」に、「灯火」は「灯芯」に依存しているとされる。そして刹那滅であると認められている「識」・「灯火」に基づいて「根」・「灯芯」の刹那滅を確立するものである。これらの比喻における刹那滅の論証を基として「灯火」による「有爲なるもの」の刹那滅を対論者に認知させ、基本命題「諸行刹那滅」へと導びこうとするものである。念のためこれらの論証における対応関係をまとめておく。

	無常	刹那滅
論難 第四	有爲一般	灯 火
論難 第五	乗り物	乗り物に乗る人
論難 第六	根	識
論難 第七	灯芯	灯 火
	(依処)	(依存するもの)

13) MSA は「轉倒」故に世間の人々は有爲なるものすべての刹那滅を認めることができないと云う。その具体的な理由として同論書は「類似したものの流れが次々と生じて来るから, *sadr̥śasam̐tatiprabandhavṛttiyā*」と説く。この考えは初期の瑜伽行学派の諸論書に散見されるもので、例えば我々は『顕揚聖教論』「成無常品」を想起することができよう。同品は「如何なる理由で世間の人は無常であるにもかかわらず常住性に執着するのか」という疑問に対して *kā.19* は「於無常無智 四轉倒根本 當知世上進 愚癡力轉増」(550b) と答えている。無智の故に常に轉倒し、無常であるにもかかわらず常住であると執着するのであると釋論は注釈を施している。その具体的な論議は、続く *kā.21* において「不如理作意 憶念前際等 相似相続轉 於無常計常」(550c) と説かれている。すなわち一に「不如理作意」であり、二に「憶念前際等 相似相続轉」(前の刹那と類似のものが後の刹那に連続して生じてくるから) であるという。なおこの「憶念前際等 相似相続轉」に関しては拙稿「極微説管見」(長崎大学教育学部『人文科学研究報告』No.38,1989, 3) p.35, 註(10)及び拙稿「刹那滅と常住説批判」(同No.39,1989, 6) 第四章を参照されたい。

14) 以上で「八種の論難」を終える。上記註1) に記したように、これらの論難は「諸行無常」を認めても「諸行刹那滅」を認めない人々に詰問を発し回答がないことを根拠に「諸行刹那滅」を立証するものである。すでに「前稿2」註記3) (pp.61-62) でも触れたように、この論証過程が *tshad ma, *anumāna* に相当すると考えられる。ここで展開される論証は、既に刹那滅であると承認されている「灯火」に基づいて有爲なるものすべての刹那滅を立証することに重点が置かれている。上記註12) で見たように第六・第七の論難で用いられる比喻においても、「識」・「灯火」などは既に刹那滅であると認められているものである。そしていずれの場合にも展開されるその内容は論難が専らで推論式などは何等用いられていない。

ただし我々は次の点に留意しなければならない。これらの論難で根拠となっている「識」・「灯火」などが既に刹那滅であることは、この拙稿が論じている「外なるものの刹那滅」(MSA 第XVIII章 *kās.89-91*) に先行する「刹那滅性の分析」(同 *kās.82-83*) ・

「内なるものの刹那滅」(同 kās.84-88)において既に論じられているのである(「前稿1」p.65参照)。識などが刹那滅であると認められていることに関してはすでに論じたことがあり(拙稿「無常と刹那」,『南都仏教』No.59, 昭63, 3, 第二章第二節参照), 今は再論を避けたい。ただそこで展開されている刹那滅論が「滅性による刹那滅論証」に基づくことに再度注意を喚起しておきたい。つまりここ「八種の論難」が tshad ma, *anumāna に相当すると考えられるとき, それは基本的には「滅性による刹那滅論証」に基づいていることを意味するからである。

- 15) この結論部分に対して MSAT は注釈を欠く。「前稿2」の註記(1)末尾に記したように (p.61), MSAT は kās.89-91 Bāhyārtha-kṣaṇikatva に対するまとめのかわりに, kās. 80-91 の「諸行無常」あるいは「諸行刹那滅」全般に対するまとめを述べる。以下それを引用する。

「すべて有爲なるものは無常である」(kā.80 comm.)と云ううち, 無常には二種類あって, 1)「無常の意味とは非存在と云う意味である」(kā.81 comm.)と云うのは, 絶対的非存在が無常ということである。2)「無常の意味はまた刹那滅という意味でもあると理解すべきである」(kā.81 comm.), それゆえ無常とは刹那滅であると立証されたのである。
(P.173a6-7, D.154b3-4)

なお, 無常の二種については上記拙稿「無常と刹那」を参照されたい。